

第五十三回輝覚祭を終えて

第五十三回大学祭実行委員会実行委員長 村上 依里

一昨年の秋、第五十二回輝覚祭終了後、大学祭実行委員会実行委員長を務めることになり、第五十三回輝覚祭に向けて活動してきました。この一年間は、私にとって悩み、葛藤しつづける毎日でした。

大学祭実行委員会とは

入学当初、大学祭実行委員会に所属していても、そのうちのほとんどの学生が活動に参加しなくなり、

実際に活動を続けている委員は有志を含めても本当にごく少数になってしまっているのが実情です。そんななか、第五十三回輝覚祭のテーマ「ユル」のもと、全学で協力し、いい大学祭を作っていくこと、飲酒問題への取り組みや模擬店、展示・研究発表、団体イベントなどの充実、ホームページや輝覚報などによる広報活動などに力を入れました。

大学祭実行委員として

この三年間、大学祭実行委員会は私の居場所であったように思います。しかしその反面私を一番悩ませたものでもありました。委員長になってからというもの、自分がやりたいことと周りが望んでいるものとの間にギャップを感じたり、自分らしい委員長になれるのか、でなければ委員長らしい自分になるべきなのかと迷ってしまい、結局自分のなりたいたい委員長像とは何だったのかと自分のあり方が分からなくなったり、委員会内の人間関係に悩んだり、また今年には教育実習もあったので、精神的につらい時期が多く、不安を感じなかった日はなかったように思います。

特に飲酒問題に関しては、委員会内でも何度も話し合い、アルコール類の販売時間の制限や、コンパ開催時の制約事項、問題行動を起こした場合の警告事項などを作って、節度をもった飲酒の仕方を呼びかけたり、教職員の方々や体育会に協力を要請して見回りを強化したりしました。しかし、初の試みだったことも多く、また打ち合わせが不十分だったこともあり、全ての徹底には至らず、来年への課題を多く残してしまいました。全てが失敗だったわけではありませんが、自分の



大学祭実行委員会委員の集合写真

思い、みんなと出会えたことが大学祭実行委員会です。得た一番かけがえのないものだと思います。今では失敗も後悔もすべて含めて、やはり大学祭実行委員会をやつてきて良かったと思えます。

最後に

大学祭は奈良教育大学全体のものです。私たちは確かに中心となって企画運営をしています。実行委員会の力だけでできるものではありません。特にこれから先、大学も各委員会もそのあり方がどんどん変わっていくでしょう。そのような中で奈良教育大学がどのような活動をしているのか地域に向けて発信できたり、学生同士、学生と教職員などが新たにつながりを深めることができたりする絶好の機会が大学祭なのです。ぜひ今後も大学祭実行委員会へのご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。



仮装行列のスタート直後の様子

Campus
Life キャンパスライフ

十年間やり遂げたという充実感

平成十四年度卒業生(学校教育教員養成課程身体・表現コース) 二木 寿代

「ただ今をもちまして成年女子飛び板飛込決勝を終了します。ピピーン」——二〇〇二年九月二十四日、よさこい高知国体にて私は、十年間の競技人生に幕を下ろした。結果は十五位。有終の美こそ飾ることは出来なかったが、十年間やり遂げたという充実感と、その間私をサポートし続けてきてくれた両親、また周囲の方々への感謝の気持ちでいっぱいになっていた。

「泳がないなら水泳部への入部は遠慮しなれ」

私が飛込競技を始めたのは中学二年生の時。学校のすぐ近くにプールがあり、そこは過去に何人も日本代表選手を生み出した、いわば飛込競技界の「メッカ」であった。私は当時から日本のトップ選手と共に練習し、環境としては申し分ないところで育った。

大学に入ってから練習も中学から通い慣れているプールで行った。しかし、大学入学当初は環境の変化についていけず、何度も挫折や自己嫌悪に陥った。「泳がないなら水泳部への入部は遠慮してくれ」当時の水泳部キャプテンにいわれた最初の言葉である。自分が自分であるために、まずは周りの人々の理解を得る事から始めなければならなかった。



コーチ(父)・後輩たちと(左上が筆者)

入学当初はトラブル続きであったが、しだいに事がうまく回るようになり、一回生の日本学生選手権では七位の成績

績を収めることができた。

「奈良教育大学飛込チーム」の誕生

二回生の春、今期の意気込みも上々だった私にある悲劇がおきた。右膝前十字靭帯損傷……授業中の事故だった。この瞬間「今年のシーズンは?!」「これからの競技人生は?!」など様々な不安が頭をよぎった。結局この年は試合に出ることを断念。悔しい気持ちをこらえ、筋力トレーニングに励んだ。

そして三回生、昨年の雪辱を果たすべく日々練習に励む私に、嬉しい出来事が舞い込んだ。「私飛込したいんです」という新入生に出会ったのだ。今まで「匹狼で戦ってきた私にとって、この上ない幸せな出来事であった。全くの初心者の彼女とともに「奈良教育大学飛込チーム」はここに誕生した。

初心者ながらも一生懸命練習に励む彼女に、私は何度も励まされたことだろう。同年の日本学生選手権では六位の成績を収め、見事昨年の雪辱を果たした。

そして最上回生になり、いろいろな意味で気合が入っていた今春、飛込経験者である後輩が入部してきた。いよいよ奈良教育大学飛込チームが三人になった。このことは団体として試合に出場できる事を意味する。つまり一種目における出場規定人数を完全に埋めることが出来たのである。私が在学している間に団体が組めるなんて一体誰が予想できたであろう……。この時から、私達は日本学生選手権団体の部で上位入賞する事を誓い合った。

日本学生選手権へ

そして九月、名古屋で行われた日本学生選手権に三人で出場することができた。初心者の後輩は、初めての大きな試

競技会場にて後輩と(左が筆者)



だが、決勝に進むことができた。結果は二回生の後輩が一位、私が八位でなんとか入賞をする事ができた。残念ながら当初目標にしていた団体での上位入賞は果たせなかったが、総合七位という喜ばしい成績を残すことができた。

今、学生生活を振り返ると、私はこの大学で、これからの私に必要な知識・経験を得ることができたと思う。それは飛込以外でのカリキュラムや人との関わりが何よりも充実していたからだ。特に三回生の時には、飛込をしながら体育会の企画部長になり、年間のイベントが盛り上がるよう努め、それらの企画書及び報告書を毎度作成し、それを手がかりに次年度の体育会がより活性化するよう務めた。そして、その年にダンス部を立ち上げ、同年の大学祭イベントでは大きな拍手を頂いたことを思い出す。

いろいろなことに対し、私がこんなに頑張れて成果が出せたのも、周りの方々の協力なしには成し得なかった。友達、後輩、先輩、先生、両親……私の限られた時間に合わせ、雪の降る冬の寒い日も、四〇度近くある夏の暑い日も嫌な顔ひとつせず指導にあたってくれた父。この父の指導から何事にも正々堂々と真正面から当たっていく精神を学んだ。これから先、今日まで自分が助けて頂いてきた恩返しを、困っている人々に還元していきたいと思う。この四年間は私にとって大きな財産である。素敵な経験をさせてもらった奈良教育大学、本当にありがとう。

合でしかも飛び順一番にも関わらず、いい演技をして見せ、周囲をアツと言わせた。新入生の後輩は試合の二週間前に疲労骨折をし、出場も危ぶまれたが、持ち前の負けん気で何とか決勝に進んだ。私も練習時間が少ないということ

奈良でいろいろなことを体験したい

日本語・日本文化研修留学生 エフイー・ラトナサリ

ホームシック

私は高校生の時から日本へ行きたいと思っていました。その時、たくさんの日本のドラマが放送されていたから日本が好きになりました。そして、やっと今年、その夢が実現しました。

日本に来てから二週間ぐらいは寂しく、国へ帰りたいと思っていました。しかし、先生や友達などが優しく、いろいろなことを手伝ってくれたので安心し、この生活にもだんだんと慣れて来ました。

ちよつと問題も

ただ、ちよつと問題になることが三つあります。まず、天気のことです。インドネシアには、雨季と乾季しかないのでも、日本の寒さに驚きました。国であまり着ていないセーターも日本では大事なものです。

次に食べ物のことです。私はイスラム教の人ですから、豚肉を食べてはいけませんし、アルコールが入っている飲み物も飲んではいけません。



ですから、パーティーに誘われた時、ちよつと問題になりました。

しかし、友達に理解してくれましたから心配する必要はありません。最後はお祈りのことです。

奈良に来てよかった

現場の日本語

二〇〇二年十月八日に、奈良に来ました。祖国で十年間日本語を教えていた私は、その日から日本語を話す勇気を失ってしまいました。

現場で生の日本語を聞いて、今まで学生に何を教えていたのか、いわゆる「文法と現場が結びつかない人」とは、私のことなのかと反省しました。そして外国語の勉強は、その国へ行かないと上手にできないなあと、つくづく感じました。

ある日、道を歩いていると、後ろから「おいしかったよね」という子どものかわいい声が聞こえてきました。この「おいしかった」は、小さな子どもでさえ、間違えずに言える語形ですが、祖国の学生に形容詞の過去形を身につけさせるのに、私は、いつも一週間もかかっていたのです。

奈良の美しさ

奈良に来て「さあ、もう一度、学生に戻ったつもりで単語や日常会話から勉強しよう」と思った私です

イスラム教の人は一日五回お祈りしなければならぬのに、お祈りができる場所がなかなかありません。しかし、先生から部屋を貸していただいたから良かったと思いました。

ここではたくさんの新しいことを学んで自分のためにしたいと思います。もともと友達もつくりたいです。

これからいろいろな楽しいことが待っていると思うので奈良が大好きです。

中華人民共和国政府派遣研究員 馬 蘭英



が、心は奈良の美しい風景にすっかり奪われてしまいました。

気がつかないうちに、街路樹の葉は美しい色に染められ、教室から見える山々も日に日に色鮮やかになってきていました。

学校へ来る途中、ときどき立ち止まって、紅葉に、緑の松に、青い空に白い雲という美しさに見とれ、カメラにおさめるだけでなく心にも焼きつけました。

風景だけでなく奈良で出会った方々の心も美しいです。ただ「親切」という言葉だけではとても言い表せません。

先生や研究室の皆様からいただいた思いやりの言葉は私にとって慰めであり、励みでもありました。おかげで日本での一年はきつと充実して楽しく過ごしていけると思っています。